



山の幸 & アプローチが核心のスラブ登り

---

## 会越国境・御神楽岳 湯沢高頭スラブ/ダイレクトスラブ

石井

---

【日時】2008年6月7日～8日

【メンバー】木下(L)、棚橋、栗原、石井

昨年の同時期、同じ御神楽岳・前ヶ岳V字スラブと霧来沢の遡行を組み合わせた「山菜&スラブ」の山行を楽しんだ。今年は二匹目のドジョウ狙いで湯沢のスラブに行ってみたく思っていたところ、同じようなことを木下さんがプランニングされていたので、メンバーに加えてもらうことにした。初日はベース設営後に入門的ルートである高頭スラブを登って偵察、山菜宴会を楽しんだ翌日にダイレクトスラブを登ろうという、手堅くも魅力的な計画だ。

前夜は磐越道上川PAで仮眠し、常浪川沿いの農村地帯から蝉ヶ平の集落を抜けて林道をつめる。終点にはすでに登山者の車があり、我々も準備を整え、左岸高くに付けられた道に行く。道は鉾山跡を過ぎると険しさを増し、越える枝沢は深く、山深い雰囲気があるが、標高は300mにも満たない。ブナ森と西谷地小屋沢、覚道沢を過ぎるとほどなく道は右へと折れ、湯沢出合に着く。左に下った狭い平地にテントを張り、ベース設営。ヤブっぽく、快適とは言いがたいが、樹間越しにこれから向うスラブが望まれた。

少し滑りやすい沢を行くと、腿まで浸かるような釜や小滝がいくつか現れるが、足の揃ったメンバーなのでロープを出すまでもなく越えて行き、20分ほどで谷は一面の雪渓に覆われるようになる。前沢出合は知らないうちに通り過ぎ、正面に陰鬱な雰囲気のある珊瑚クラックを見ると、雪渓は斜度を徐々に増して右折する。両岸も迫りノドのような地形だが、厄介らしい滝は全て厚い雪渓の下であり、水音が微かに聞こえるのみだ。サクサクと雪渓を登っていくと、やがて正面スラブや三角スラブが見えてくる。ここまで来るとスラブ群はさほど立っているようには見えず、苦勞なく登れるような気がした。

高頭スラブへは、雪渓が途切れて滝の出ている正面スラブ寄りまで雪渓を詰めてから岩へと乗り移る。灌木混じりながらもフリクションの効くスラブは、フリーでグイグイと高度を稼げるので、先頭の栗原さんがどんどん行ってしまふ。右にトラバース気味に上り詰めると、一ヶ所涸れた連瀑帯のようになっており、乗っ越しのワンポイントが悪く、残置ハーケンもあったのでロープを出す。あとは引き続いて登りやすいスラブが続く、少しヤブを漕いで右にトラバースすると、呆気なく登山道に出た。

下りは噂に聞く通り、ナイフリッジや立った岩場もあるスリリングな道で、一般道にしては相当険しく、迷いやすくもある。だが、振り返れば湯沢奥壁のスラブ全体が一望でき、ルート概念を掴むには最適だった。ダイレクトスラブは幅も狭めで彫りの浅いスラブで、取り付きは思っていたよりもだいぶ本谷寄りのように思えた。断層帯が顕著であり、各スラブに門のように立ちほだかっている、特に山伏尾根のドームが印象的だ。

ベースへと下り、山菜採りと釣りに出かける。山菜の方は少ない上に時期が遅いようで、ウレイをどうにか確保した程度であり成果なし。釣果の方は、棚橋さんと石井で一匹ずつ、食卓に彩を添えることができた。薪が少ないので焚火は諦めながらも外で宴会を執り行い、夕方にテントに入る。夜半に通り雨がいったようだが、概ね天気は大丈夫そうだ。

翌朝は早めに起きたものの、寛いでコーヒーを啜ってから出発、昨日と同様に雪渓を登る。高頭スラブを過ぎて左の本谷へと進むが、案の定次のノドの部分で雪渓は切れていた。右に左にルートを探るが、結局石井リードで左岸側の灌木混じりの岩場に移ってロープを伸ばす。40mほどで懸垂の支点があったのでピッチを切り、続く栗原さんがお助けロープを伝って上の雪渓へと移る。だが、その先を見てきた栗原さんが、また雪渓が切れているようなので引き返してきた。そうなるに直接稜側から高巻くしかなく、栗原さんリードでⅢ級程度の岩場を登る。しかし、沢靴で登っていた栗原さんがテラス上の垂直部で行き詰まり、アクアステルスで登っていた石井に交代する。

昨日尾根上から見えていた灌木混じりの岩峰は、プロテクションには困らないものの、傾斜も強くて苦しい登りだった。だが、同じルートを辿った形跡は残置ハーケンからも明らかであり、間違いではないようだ。ほぼ50mいっばいまで伸ばしてようやくピナクル上に立つ。湯沢奥壁スラブの展望台としては最高の眺めであり、思いがけず贅沢なロケーションを楽しめた。なお、三角スラブの流水は正面スラブの大滝の上へと流れ込んでおり、登山大系の概念図とは少々様子が違っていた。ダイレクトスラブへは水平な稜を少し辿り、立ち上がりの灌木帯を左にトラバースして広いバンドに出る。程なく右手は浅い窪状の地形となるが、これはダイレクトスラブではなく、取付きはさらにバンドを進んで一段上がった先で、両岸を門のような小ピナクルで挟まれた涸滝がそれである。

ここまでやや手こずった感があったが、ひと休みして呼吸を整えてからスラブを登り出せば、フリーでグイグイ登れる易しめのスラブが行けども行けども続くのみ。時には隣の中央スラブを覗き込み、或いはその先の山伏尾根のスカイラインを眺めながら、順調に高度を稼いでいく。途中、断層帯付近で傾斜の強い滝状となり、残置も見られたが、慎重にスタンスを確かめつつ、ロープを出すまでもなく越えられた。日差しもあり、暑い位の陽気なので、直接稜と三角スラブ上部が接近する900m付近で休んだ。それより上部もスラブが続くが、やや砂利や藪が多

くなってきて、快適さが失われていく。詰めは15mと5m程の脆いボロ壁となっており、ロープ使用で登って湯沢の頭近くの支尾根へと出た。登山道を左に僅かでピークであり、御神楽本峰に突き上げる御神楽沢の各スラブが圧巻だ。

下山は高頭まで少しアップダウンがあるものの、それより下は道こそ悪いが昨日と同じなので勝手はわかっている。一時間半ほどでテントへと帰着、幕場を後にして登山道に戻り、帰路は御神楽温泉に入って帰京した。

### 【コースタイム】

**6月7日** 林道登山口(8:30)－湯沢出合(9:25/55)－高頭スラブ取付(10:45/55)－登山道850m付近(12:05/35)－湯沢出合(13:30)

**6月8日** 湯沢出合(5:55)－雪渓から直接稜へ(6:45)－ダイレクトスラブ取付(9:40/55)－湯沢の頭(12:15/40)－湯沢出合(14:15/40)－林道登山口(15:40)

### 【地形図】1:25000 御神楽岳



下山の尾根上540m付近より湯沢スラブ全景/  
<http://www.tomanokaze.dojin.com/>





雪溪を登る（正面は直接稜の岩峰）



快適な高頭スラブの登り



山の幸、溪の幸



スラブに咲くヒメサユリ



門のようなダイレクトスラブ取付



ダイレクトスラブ上部の登り